などと書たる也、本は麻糸の麻筒より出て、轉用して水麻筒と云たる也、職人歌合繪土佐光信ノ畫に、檜物師がワゲ物を作る體を書たる傍ノ詞に、ゆおけにも是はことに大なる、なにのためにあつらへ給ふやらむとあり、ゆおけは湯桶也、此歌合は甘露寺親長卿の作也、明應の頃の人也、其頃迄も桶は曲物にてありし也、同繪に酒造りを畫たるには、今の桶のごとく竹の輪を入たる桶を畫たり、其頃は二品ありて、湯桶などは古風殘りて、ワゲ物を用しなるべし、竹の輪入は樽也、

〔傍廂前篇〕桶　箱

或人云く、桶と箱とは互に文字をあて違ひたるなり、桶は竹もて玄むる物なれば、竹に從ふべし、箱は木もて造るなれば、木に玄たがふべしといへり、これ字をのみ玄りて、其器のもとを玄らぬなまさかしき僻說なり、桶は麻を績み入るゝ器にて麻筒（タケ）といふ、檜の曲物なれば、竹の器にあらず、箱は木なるも、竹にてあみたるも、葛もて組みたるもありて、一樣ならず、古書、古畫にあまたあり、實を玄らずして、推量の理屈だては拙くうるさきものなり、

桶製作

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕桶音統　桶、和名乎計、　箍音狐、以篾束物也、俗云桶之和、

按桶双木板爲側、以篾（タケノワ）爲繩、縛之近底、箍名奈岐和、其木以杉爲上、槇次之、栂樅又次之、其他易朽、

棬桶和介乎計　棬檜薄板作之、不用箍以樺皮縫之、漆桶苧桶貝桶等用之、

〔西遊記續編二〕孟宗竹

暖國には竹よく生育す、寒國は竹にあしく、信濃の國には竹一本も生ぜず、甚だ不自由成事なり、桶の輪には竹にあらざれば叶ひがたきゆへ、三河尾張より輪につくりて送り來り、甚だ高直なり、○中略それより北方越後出羽奥州も、南部領邊は人民一生竹を見ざるもの有、太き竹は絶てなし、夫故人家の邊に南國の如く竹藪といふものなし、山中に笹あり、熊笹にて竹の用に立べきものに非ず、○中略竹なくてもさのみ不自由なる樣にも見えず、只桶の輪のみ何方にても難儀に見